

読売

# 教育ネットワーク

社会はまるごと学校——  
すべての大人が先生です



新聞を使った研修を取り入れた東海エンジニア(2月21日、東京都港区で/2・3面へ)

巻頭特集

「**新聞のちから**」新聞活用してスキル磨く 2・3

**新聞@スクールセミナー** 4・5

英語で熱く  
アピール **全国高等学校英語スピーチコンテスト** 6・7

**ロボットとゲームのプログラム作り** 千葉・市川高 8

写真展「こどもの目線」 9 リレーエッセー 英ロンドン大学 ロイヤルホロウェイ校「劣等感の克服」 10

2018.3

Vol.39

# 新聞活用してスキル磨く

読売新聞社は、社会人や大学生に向け、新聞を活用して、「書く」「読む」「会話する」の三つの力を高めてもらう研修プロジェクト「新聞のちから」を展開している。わかりやすく正確な文章を書くコツ、紙面から短時間で社会の動きをつかむ読み方など、新聞社ならではのノウハウを、ビジネスや研究・勉学の場で生かすプログラムが用意されている。講師を務めるのは取材や記事添削の経験が豊富なベテラン記者たち。企業や大学での実際の取り組みを紹介する。



企業で

## 膨大な情報を簡潔に

ALSO K東京は「書く力を磨く」警備力アップ」をコンセプトに昨年9月から半年間、警

備隊長試験合格者ら15人を対象にした研修を行った。高層ビルや大型商業施設の警備を指揮す



当問記者(右)による文章の書き方講座にのぞむALSO K東京の社員たち

る隊長には膨大な情報を簡潔な報告書にまとめることが求められ、このスキルを高めるのが狙いだ。読売教育ネットワークショップが2週間に1回、新聞記事ワークショップを配信し、受講者は記事に即した600文字の小論文課題に取り組んだ。

1月26日に行われた集合研修のテーマは「文章が上達する新聞記事の読み方」。同ネットワーク事務局の当問記者がニュース記事の構造を解説。「核心情報、原因、結果、影響を意識しながら読む」「情報の足し算ではなく引き算、情報の断捨離を意識しましょう」と伝え、「冒頭の一文に最も伝えたい要素を簡潔な形で示し、文章のぜい肉を落とそう」とアドバイスした。

### 書く力の大切さ学ぶ

受講者の岡野勇樹さん(32)は「小論文の添削で鍛えられた」と振り返る。大切な結論を冒頭に書いているか。論旨の組

### レポートをほめられた

仮想通貨をめぐって、肯定、否定派に分かれ、議論が盛り上がるなど、ふだん別々の職場で働く社員たちは、作業をする間にすっかり打ち解けた様子だ。各班の発表の後、藤田記者は「皆さんの論文を添削して、個々の筆力はあると感じていた。今日はチームワークの力も実感してもらえたのでは」とまとめた。

「自分とは違う視点や価値基準を知ることができた」と内定者の松田詩浦子さん(22)が書くことに苦手意識があったと

# 新聞のちから

## 社会人として必要な判断力養う

山梨学院大学

大学で

スポーツ強豪校として知られる山梨学院大学。競技生活一筋で育った体育会系の学生に対する学業支援の一環として2017年度から始めたのが、新聞を活用した課外授業「デュアルキャリア形成A」(通称読売クラス)だ。

担当の小西順人・現代ビジネス学部教授(51)によれば、狙いは、社会人として活躍するのに必要とされる社会意識や行動特性を育てることにある。

授業は、受講生全員が読売新聞を読み、学期中、毎月1回の講義で、ニュースを手がかりに、社会の様々な問題について考える力、判断する力を養うという構成だ。

この授業は、体育会系学生



新年度の講義について池永記者(右)と意見交換する山梨学院大学の受講生

を学業面でサポートする学生アドバイザーの実務研修も兼ねている。1時間半の通学時間で新聞を読む習慣を身につけたという現代ビジネス学部2年の増沢あかりさん(20)は、「ニュースの背景とか関連性などに目がいくようになり、新聞の面白さを発見した。一流アスリートのサポートにも役だった」と話す。

新聞を活用して高める三つの力のうち、「書く力」の研修は、わかりやすく正確な文章を書くことによって、報告書や企画書などの文書の質と業務の効率を向上させるのが目標。「読む力」では、現代の膨大な情報の海から必要なものを、役立つ内容を短時間で選びとる目を養う。「会話する力」は、話題の引き出しを増やすとともに、社会的な分析力をアップさせ、異世代や異業種の人たちとのスムーズなコミュニケーションにつなげる。

講義やワークショップという集合研修と、ワークシート、論文添削による通信教育を組み合わせて継続的な学習ができるのが、研修の特色だ。若い世代には新聞を定期的に読む経験がない人も多いため、講義ではまず、新聞の効率的な読み方を伝授する。記事をもとにしたワークシートは、読む力と書く力を同時に高められるよう設問を工夫している。提出された論文課題は記者である講師が添削し、講評を付けて返す。時には厳しい指摘もあるが、「報告書が読みやすくなった」など、実践力がつくとの評価を受けている。

**講師料不要**  
新聞を活用するため、研修期間中は参加者全員に定期購読してもらう。原則として講師料や添削料は不要。



班でまとめた自分たちだけの新聞を披露する東海エンジニアの研修

企業で

## 興味ある記事で新聞作り

「知的情報力を高めるゲームをしましょう」。講師の藤田幸久記者の声に、受講者は一斉に朝刊をめくり始めた。東海エンジニアでは、2月21日の集合研修で「まわしよみ新聞」に取り組んだ。3、4人の班を作り、関心を持った記事を切り抜いて、選んだ理由や記事の背景をほかの参加者に説明する。班ごとに話し合いながら、トップ記事を決め、自分たちだけの新聞を作っていく。

入社間もない若手と内定者4人の計13人が受講した。富士通グループの同社は、競輪・競馬場などのオンラインシステムの運用・保守を担っており、社員

のほとんどがエンジニア。技術

東海エンジニア(東京都港区)

いう入社1年目の徳永雅人さん(23)は「研修で学んだ通りに、社内レポートを結論から書き起こしたら、先輩にほめられた。自信がついてきた」と話していた。

## 研修内容とスケジュール

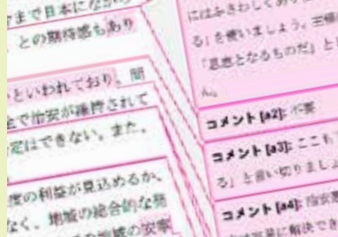
## 継続的な学習で実践力つける

- 講義メニュー例
  - 「伝わる」文章作成講座 **書く力**
  - 「核心に迫る」読解法 **読む力**
  - フェイクに惑わされない情報収集法 **読む力**
  - 本音を引き出す会話術 **会話力**
  - 英字新聞で時事英語マスター **その他**

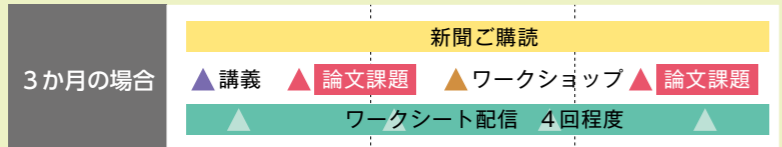
### ●ワークショップ ●ワークシート

- まわしよみ新聞
- 模擬記者会見
- 私のおススメ記事

### ●添削例



### ●研修期間と具体例



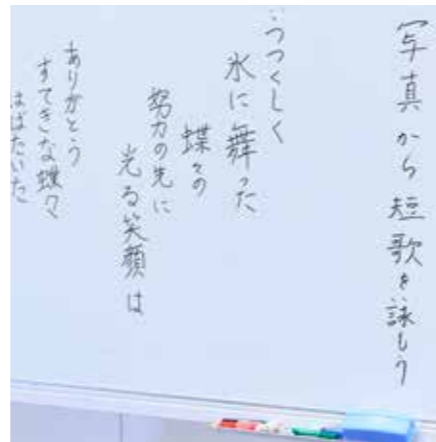
# 新聞@スクール セミナー

新聞で  
アクティブ・  
ラーニング

新聞活用学習を考える「新聞@スクールセミナー」が2月24日、東京・大手町の読売新聞東京本社で開かれた。次期学習指導要領に盛り込まれた「主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）」を、新聞を教材にして行う手法について、全国の小中高校の教員や大学生ら約80人が学んだ。参加者からは「参考になる実践ばかりだった」「学校ですぐにやってみよう」「熱心な先生たちの話に元気をもらった」などの感想が聞かれた。



作った短歌を披露し合って交流する小中高校の教員ら



2月24日朝刊運動面の宮原選手の写真から詠まれた短歌

## 写真と記事で短歌

東京都杉並区立高井戸小 田村香代子 主任教諭



ワークショップは、東京都杉並区立高井戸小の田村香代子教諭の指導で、新聞写真から短歌を詠む実践に参加者全員が挑戦した。

ワークショップは、当日の朝刊。平昌五輪のフィギュアスケート女子フリーで舞う宮原知子選手の写真を指し、「短歌を詠んでみてください」と呼びかけた。さらに、「宮原 完全燃焼」などの見出し、記事を次々に示している。参加者は10分間の短歌作りを取り組んだ。

### 田村教諭の新聞を活用したその他の実践例

日常的な 取り組み	新聞スクラップ	毎回テーマを設定し、気になる記事を選び、その理由や感想を書く
	4コママンガの文章化	起承転結に着目して説明し、オチを見つける
総合的な 取り組み	言葉の貯金箱	気になる新聞の見出しを切りため、テーマを決めて紙にまとめる
	誕生日新聞	生まれた日の新聞を今と比較し、思い出、目標をまとめる
	スクラップ新聞	テーマを決めて記事を集め模造紙大の新聞を作る

オペラ「蝶々夫人」の曲に乗った宮原選手の滑りの様子から感謝の気持ちを表現したい」と話し、「ありがとう すてきな蝶々 はばいたいた 僕はおくるよ 金メダル」と詠んだ。

## 子どもと社会つなぐ新聞

文部科学省初等中等教育局 大滝一登 視学官



高校と大学で教えているとき、新聞は重要な教材でした。情報の宝庫であり、無限の可能性を秘めている。次期学習指導要領に「主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）」が盛り込まれ、新聞の重要性は高まっています。紙面は、子どもと社会をじかにつなぐ役割を担っています。

### 基調講演

### 実践報告

#### 衆院選新聞を比べ読み

京都学園中学高等学校（京都市） 伊吹侑希子 司書教諭



中学1年のオリエンテーションで、テーマを決めて気になる新聞記事を切り、グループ内で話し合いながら模造紙に貼って独自の新聞を作る「まわしよみ新聞」を取り入れています。それまで交流のなかった生徒と話すきっかけになります。

#### 「新聞ビンゴ」で興味引き出す

東京都文京区立関口台町小 菅井和生 教諭



主体性を育むのに、新聞スクラップは効果的だと考えています。ただ、遊び心も大切。年度初めには「新聞ビンゴ」に取り組みます。児童が各自で記事を選び、その中に教師の選んだ記事があるかビンゴ形式で当てさせて、「新聞って意外に楽しい」と感じてくれる授業を心がけています。

#### ◆まとめ 記事を通じて多くの出会い

読売教育ネットワーク 秋山純子アドバイザー

東京都内の公立中学の国語科教師、そして校長として、「出会いが子どもたちを育てる」を教育理念に新聞を活用してきた。人生で出会える人は限られているが、新聞を手に入ると記事を通して、いろんな人と出会え、いろんな経験ができるからだ。

### 記者が出前授業 新聞活用のヒントに



読売新聞が教育面と地域版で、昨年秋から始めた新企画。子どもたちに新聞から社会を知ってもらいたい。そんな思いを込め、記者や報道カメラマンが教室に出向いて「出前授業」を行い、その模様を紙面で紹介しながら、新聞を使ったことがない先生にもヒントとなる記事を掲載している。

問い合わせ 教育ネットワーク事務局 ☎03・3217・1966 <http://kyoiku.yomiuri.co.jp/>

The Road to Happiness

全英連会長賞 第3位

幸福への道

さいたま市立浦和高校1年(関東甲信越) 佐藤萌香さん

朝早くから夜遅くまで働く父親の... 幸福への道... 佐藤萌香さん



Allow Me to Have Two Passports

読売新聞社賞 第2位

二重国籍を認めて

愛知県立尾北高2年(東海北陸) 長谷川心那さん



「私の顔を見たとき、最初に心に... 二重国籍を認めて... 長谷川心那さん

Make Your Voice Heard

文部科学大臣賞・文部科学大臣杯 第1位

あなたの声を届けよう

土佐高2年(四国) 小松梨那子さん



高知県議会議員に会いに行き、疑... あなたの声を届けよう... 小松梨那子さん

審査委員長の鳥飼玖美子さん(左)から表彰を受ける小松梨那子さん



文部科学大臣賞に小松さん

第1部

英語で熱くアピール 第11回 全国高等学校英語スピーチコンテスト

Acceptance

読売新聞社賞 第2位

受け入れること

沖縄県・沖縄高専1年(九州) 東恩納亜仁香さん

最初に韓国語、中国語、ロシア... 受け入れること... 東恩納亜仁香さん



The Elephant in the Room

外務大臣賞・外務大臣杯 第1位

部屋にいるゾウ

神戸市立葺合高2年(近畿) グリア鷹さん

「部屋にいるゾウ」とは英語の... 部屋にいるゾウ... グリア鷹さん



外務大臣賞にグリアさん

第2部



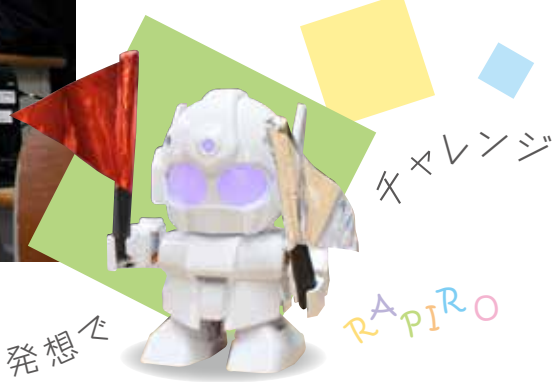
第11回全国高等学校英語スピーチコンテスト... 第1部は高知・土佐高2年の小松梨那子さん、第2部は神戸市立葺合高2年のグリア鷹さんがそれぞれ優勝した。

\*英語圏に通算1年以上住んだ経験がない生徒らが第1部に、英語圏で通算1年以上暮らしたことがある生徒らが第2部にそれぞれ出場した。



高校生たちがプログラミングしたゲームで、子どもたちはロボットとゲームを楽しんだ

ロボットをアシスタントにしたゲームを楽しもう——。高校生が小学生にロボットの面白さや可能性などを教える特別講座が3月10日、私立市川高校(千葉)で行われた。昨年7月に続く試みで、慶應義塾大学の研究チームのサポートを受けた2年生5人は、旗揚げやしりとりゲームのプログラム作りに挑戦した。



柔軟な発想で

千葉・市川高

## ロボットとゲームのプログラム作り

### 相棒ロボットも投入

「白揚げしないで赤揚げて」「赤揚げたまま白揚げて」  
コミュニケーション型ロボット S O T A のかけ声に合わせて、手足の動くロボット R A P I R O と地域の小学生らが紅白の旗を上げ下げする。  
子どもたちはバツパッと切り替えるが、R A P I R O の動きはちよっぴり緩慢だ。

「あれ、白旗が揚がらないよ」「どうしたのかな?」

「あ、動いた、よかった……」  
旗揚げゲームを作ったのは蓮尾瑞月さん(17)、佐藤百恵さん(17)、高西恵菜さん(17)の3人組だ。昨夏は S O T A を使った理科実験を行ったが、準備不足などで実験がうまくいかず、今回はリベンジ。「より質が高い授業を行いたい」と、S O T A の相棒として R A P I R O も参加させた。

ロボットに仕事をさせるためには、目標を達成させるための手順をコンピュータに説明する必要がある。その指示内容をまとめた命令文がプログラムだ。  
3人は昨夏、プログラムを自动生成するアプリケーション「PRINTEPS」を使ったが、「プログラムそのものを作ってみた」と奮起。R A P I R O が旗



授業後、小学生にロボットを動かすアプリPRINTEPSの仕組みを教える小田さん(右)

を持つときの腕の角度を自分たちで決め、プログラムを書き換えた。

### 未知の世界に挑戦

ゲームに参加した権藤遼さん(10)は、「S O T A の指示通りに R A P I R O が動いたので驚いた。プログラムを作った高校生はすごい」と話す。だが、全てが成功したわけではない。

蓮尾さんらは当初、発汗・心拍測定センサーを駆使してウソを見抜くゲームを作ろうとした。サポートする慶大の高橋正樹准教授(40)、萬礼応特任助教(30)も意欲的な企画と注目したが、「センサーの測定値分析が難しかった」と断念した。

S O T A が子どもたちと行うしりとりゲームも、直前にプログラム・エラーが見つかり実施できなかった。

担当した小田みづきさん(17)と山口琴音さん(17)は「もっと早めに準備していれば……」と残念がる。  
2人にとってプログラミングは未知の世界だった。入門書を手にも、「最初は足し算と掛け算で、次は条件を満たした場合と満たしていない場合の関数。細かいルールもあって戸惑いました」と、小田さん。

試行錯誤を繰り返すうちに、「二つ一つの関数、式に意味があることが分かり、面白くなった」と山口さんは振り返る。

指導した萬特任助教は「やりたいことを実現するためプログラミングに挑戦したのは評価できる。情報工学を専攻する大学1年レベルの取り組み」と話す。しりとりの基本構想について驚かされたという

のは高橋准教授。「私たちがいたら完璧な単語リストを用意し、絶対に負けないゲームを作る。でも、2人は小学生を楽しませるため、わざと『ん』のつく言葉登録し、負けるゲームを開発した。とても柔軟な発想だ」。

### スーパーサイエンスハイスクール

市川高校は、文部科学省の指定を受けて先進的な理数教育を行うスーパーサイエンスハイスクール。生徒たちはグループごとに興味を持った課題に取り組み、実験を重ね研究結果としてまとめる。慶大との連携もこの一環として行われた。



## パネルとスライドで作品紹介

読売新聞社が小中学校を対象に行っている写真出前授業「見る・撮る・伝える」(協力・キヤノン)に参加した児童生徒の作品展「こどもの目線」が、3月、東京・大手町の読売新聞東京本社で開かれた。

2017年度の参加校19校の子どもたちが選んだ「この1枚」をパネル展示とスライド映写で紹介。瑞々しい感性で切り取った子どもたちの世界に、訪れた大人たちも引き込まれた様子だった。

自由な発想 羽ばたく感性

## 写真展「こどもの目線」

キヤノンが小学生向けに行っている写真教室「ジュニアフォトグラフィーズ」の作品も展示された。

### 手書きのタイトルと説明文

会場の3階ギャラリーには、約120点をパネルで展示。それ以外の作品は大型テレビモニターを使ってスライド映写した。パネル展示の作品の下には、子どもたちが自ら考えたタイトルと説明文の手書きの文字を、そのままコピーして貼り出した。

「学校から帰ってきてすぐに洋服をぬぎすててお風呂を出て散らかっている所を見たけど、『まあいつか』っと思いついてテレビを見ていたら……」(小学6年女子)

「日曜日に、なんとなく寄った公園で、なんとなくブランコに乗って、なんとなく撮りました」(中学2年女子)

説明文はユニークなものばかりで、読みながらうなずいたり、微笑んだりする人も多かった。

スライドは学校別に時間を区切って映写。会場を訪れた子どもたちと家族は、自分やクラスメートの作品に歓声を上げた。

### 本格スタジオで家族を撮影

会場奥の写真スタジオでは、子どもたちが家族を撮影するイベントが行われた。スタジオには大型ストロボ2灯、レフ板、バックペーパーが備えられ、写真出前授業の講師を務める横山聡記者(読売新聞教育ネットワーク事務局)が撮り方をアドバイスした。4月から6年生の柳澤舞莉さん(11)(茨城県つくば市立今鹿島小)は、父の会社員貴志さん(42)と母の琴美さんを撮影した。舞莉さんは三脚に固定された一眼レフカメラの前に、ちょっと緊張気味。貴志さんと琴美さんが色々なポーズをとり、それに合わせて次々とシャッターを切った。プリントを受け取った舞莉さんは「ポーズの注文をつけるのが難しかったけれど、きれいに撮れてよかった」と笑顔で話した。



カメラに向かう柳澤舞莉さん

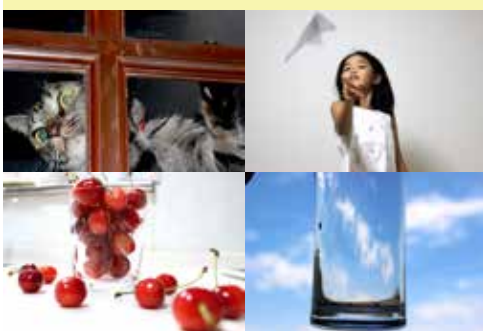


舞莉さんが撮った両親の写真

### 写真出前授業

### 2018年度も約20校で

写真出前授業は2007年度にスタートした。キヤノンから提供を受けた一眼レフカメラを約1週間、自由に使って写真を撮ることができるのが特徴だ。授業は計3回で、最初の授業では撮り方やカメラの扱い方について写真記者がアドバイス。2回目に作品を1枚選んでタイトルと説明文を書く。3回目の授業で、選んだ写真を一人ひとりクラスメートに紹介する。詳しくはウェブサイトへ



海外で学ぶ・リレーエッセー ③9

英ロンドン大学ロイヤルホロウエイ校  
「劣等感の克服」

関西学院大学千里国際高等学校（大阪府 卒）、ロンドン大学ロイヤルホロウエイ校2年（執筆時）

直田 彩加さん



ロンドン大学ロイヤルホロウエイ校での時間は、私にとって、とても実り多く、有意義なもの

私に物事の視野を広げさせ、も



1年の終わりと、夏の始まりを祝う大学主催のパーティーで友人と。直田彩加さん(右)=本人提供

ロンドン大学  
ロイヤルホロウエイ校

ロンドン大学のカレッジの一つでキャンパスはロンドン近郊のサリー州エガム。1879年に創設され、学生総数は9966人。このうち1974人は英国、欧州連合（EU）諸国以外の国・地域からの留学生。

つと広がった世界へと導いてくれた。そして何よりも、自分に自信が付き、他人との違いを受け入れられるようになった。私は13歳の時、イギリスのケンブリッジに1年間滞在した。それまでの環境とは全く異なつた場所、友達とうまくしゃべれず、授業でも黙ってしまい、やるせない気持ちだった。こんな経験から、他人に対して劣等感を抱くようになっていた。留学を決めたのは、自分が抱える困難に正面から向き合い、文化の違いに伴う自信の喪失を克服するためだった。

ロイヤルホロウエイを選んだ理由はいくつかある。由緒のあるキャンパス、多様なコミュニティ、そして何より、満足度

の高い教育を提供していることだ。専攻する政治学・国際関係学（P.I.R.）は、ロイヤルホロウエイでは常に新しい研究がされており、学べる環境がとても充実している。例えば、週に一度、大学関係者を対象に公開講座が開かれ、学生は常に新しい研究に出会い、教授と対等に討論することが出来る。インプットが多く、アウトプットの少ない日本とは対照的に、意見を述べることに重きを置くため、魅力が私にはとても刺激的で、魅力的に感じた。

日本では、授業中に発言する機会が少ない。私は、自分の意見を持っていても、大勢の前で失敗をして恥をかくのが怖くて、発言をためらうのが常だった。毎日のように討論しなければならぬ政治・国際関係学の学生としては致命的だった。それだけに、このようなアカデミックな場は、知識を得るだけではなく、英語表現の正誤にとらわれずに、自信を持って発言する力をつけてくれた。

そして、私の周りには、自分を肯定することを教えてくれた素晴らしい友達が多かった。たわいのない会話から、（社会問題などの）真剣な話までできる友達と出会い、彼らと一緒に過ごしている時間が多くなるにつれ

て、自分が劣等感を持っていたことも忘れ、居心地がよくなつていった。一人の友人は私のことを、日欧の文化、考え方の違いを隠そうとしないところが好きだ、と言ってくれたことがある。今私は何らためらいなく話をしているし、違いに劣等感を感じることもない。

それまで慣れ親しんできた場所を離れることは容易ではなく、努力を要することも多い。しかし、ロイヤルホロウエイは、一人の人間として自信をつけたいという私の目的をかなえる機会を与えてくれる場所である。人種や文化の違いを乗り越え、日本人として、意見を持った一人個人として、自己を肯定することができた。これらも様々な困難に直面するだろうが、ここで得たものはそれ以上に大きく、自分を見失わない強さを育んでくれた。

（会報編集部抄訳 The Japan News 2017年9月21日）

海外留学を目指す高校生に進学支援を行っているNPO法人「留学フェロウシップ」のメンバーが、海外のキャンパスライフをリレー連載します。留学フェロウシップの詳細はウェブサイトへ。 <http://ryu-fellow.org>

英語の原文は <http://the-japan-news.com/news/article/0003896026> でお読みいただけます。